私立キド探偵事務所

蔵ハム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私立キド探偵事務所

【Ｎコード】
Ｎ１２９２Ｌ

【作者名】
蔵ハム

【あらすじ】
私立探偵　百逢キド。　その男はお客様から取り寄せられた依頼や、難解な事件をすべて解決してきた男。
今日も依頼をこなし、事件を解決。　その男は、何故世の為人の為に探偵をするのか。
その理由はキドしか知らない。
合言葉は、「私、不幸な男です」

※オリジナルキャラによるオリジナル小説です。　ですが、様々な版権物からクロスオーバーをして頂いても構いません。
内容はほとんど執筆者の僕が書きますが、これを読んでくださった読者様からこんな事件を解決してほしいなどというリクエストを頂き、それを元にしたお話も書いていこうかと思っております。つまり、依頼や事件のリクエスト大歓迎という事です。※

「さぁて、今日もお仕事がんばりますよ！！」

私立キド探偵事務所に居る所員の秘密プロフィール

私立キド探偵事務所に居る所員の謎となっていたプロフィールをそなたにひっそりと届ける。
また、このプロフィールを読み終えた際は、必ず焼却する事。
もし焼却しなければ、待っているものは「死」である。
では、以下が所員達のプロフィールである。

※本編をご覧になる前に、こちらのプロフィールを読んでください。後々登場してくるキャラが出た時に、ここに新たに記載させて頂きます。※

私立キド探偵事務所所長：百逢キド
年齢：１９才
性別：男（髪の毛がものすごく長いため、女と間違われる場合も多々ある）
好きな物：自由　平和
嫌いな物：悪者

私立キド探偵事務所武闘派所員：チェイサー
年齢：不明。おそらく２１才と思われる
性別：男
好きな物：猫（三匹飼っている）
嫌いな物：自分が和んでいるのに、その邪魔をする人
ーーー以上ーーー

第一話　「幕開け」（前書き）

どうも、執筆者蔵ハムです。
こんなド下手な小説を見ていただき幸いです。　文章を書くのは初めての事なので、おかしい所がある場合がございます。　その時は目を瞑ってください。

では、始まります。

第一話　「幕開け」

～明朝～

「どうも、ありがとうございました！！」
「いえいえ、お気になさらず。我が探偵事務所はどんな依頼でもお受け致しますので。またのご依頼をお待ちしております」

一人の親子が探偵事務所から出た。

「ふぅ・・・これで、ひとまず一つの事件は解決ですね」

ゆっくりと事務所の椅子に座る男。
その格好は探偵とは思わせない真っ黒なジャンパーを着ており、上半身には骸骨が描かれた白いＴシャツ。下半身には青いダメージジーンズを履いていた。

「不休で捜査をしていたのか、少々疲労が残っていますが、気にせず休みながら資料でも目に通しますか」
机には大量の依頼が書かれた紙が置いてある。

「コーヒーはやっぱりブラックですねぇ。　こんな朝早くから飲むのには快適です」
「・・・帰ってきていたのか、所長」
「えぇ、ただいま迷子の捜査依頼を受けて、迷子を見つけて帰ってきた所です」

二階にこっそりと佇む男の影。
その格好はグレーのトレンチコートを着ており、上半身には８５と

書かれたYシャツ。下半身には黒いズボンを履いている。

「で、今度の依頼は何だ？」　「それを今探している所ですよ」

所長と呼ばれている男がゆっくりと依頼を目に通している。

「・・・この依頼、少々気になりましたね」　「何だ？」

依頼内容は、とある政治家の護衛である。　こういうのは所長の傍に居る男が専門的なのだが、今回は所長とその男である。

「私はこういうのはあまり受けませんが・・・どうも気になりません？」

「・・・確かに、な。　私も気になる。　何故　所長と「二人」で護衛をするのか」

「じゃあ、やってみます？」　「やるか、所長」

男達は急いで着替え、準備等を行った。

「じゃあ行きますよ、チェイサーさん」　「あぁ、キド所長」

依頼に隠された、一つの謎を追いかける為に。

第一話　「幕開け」（後書き）

執筆者「最後まで読んで頂き、まことにありがとうございます。感想なども残してくれたら、嬉しいです」

キド「私には、一つ気がかりな事がありますが、よろしいでしょうか？」

執筆者「何？」　キド「何故、私の部下であるチェイサーが私に対して敬語を使っていないのかという事です」

執筆者「その事については僕が説明致します。

事務所の所長であるキドは、常に誰に対してもキド、と呼ばせています。　また、自分に対しては敬語など一切不要と言っています。

でも、敬語を使う方が居たり。

なので、部下のチェイサーも、敬語を使っていないのでございます」

キド「これで疑問は晴れましたか？　そうでありましたら幸いです」

執筆者「それでは、また次回にお会いしましょう」

第二話　「裏　前編」（前書き）

どうも、執筆者蔵ハムです。
こんな小説を見てくださっている方が居るとは・・・・嬉しい限りです。
どうか、このお話も最後まで見に頂ければ幸いです。
後、自由に感想なども残して頂けると、執筆の参考にもなりますのでどしどし書いてください。
それでは、始まります。

第二話　「裏　前編」

「どうも、私立探偵のキドです。　依頼を確認し、その依頼を受けに来ました」
「おお、貴方が名高い百逢君か。　では、こちらへ」

今回依頼を出してくれた政治家の元へ、来た。

「先に私から自己紹介を。　私は吉田則之。自分で言うのもあれだが、命を狙われている政治家だ。　そして、こちらは私の秘書、桜井良太だ」
「はじめまして、桜井です。　あの有名な探偵に出会えるとは光栄です」

ペコリと桜井は礼をする。

「私は百逢キド。　こちらは部下のチェイサーでございます。　チェイサー、挨拶を」
「・・・よろしく頼む」
「早速ですが、命を狙われている、とは？」
「ええ、実は・・・・」

現在、吉田則之は、この度行われる選挙で、町民から大きな支持を受け、非常に有利な立場である。
だが、以前演説会を行った際に、なんと狙撃手から命を狙われたのである。
その時は護衛団によって無事回避できたが、いつ自分の命が狙われてもおかしくないという状況だと思い、キド達に依頼をした、との事である。

「ですが、気がかりな事が一つ。　本来私の部下が、護衛の依頼は受けますが、何故私も同行を？」
「その説明は私がさせていただきます」　桜井が前に出る。
「私は、以前の狙撃手の襲撃事件の時に、こう思ったのです。　狙撃手の位置さえ解ればこちらも対応が出来る、と。その為に、キド様。　貴方の確実なる頭脳をお借りしたかったからです」
「つまり私には、策士をやって頂く、という事ですね？」　「はい。ご察しが早くて嬉しいです」
少しでも、行われた狙撃計画を立てた者と、狙撃手を捕まえたい所だが、こちらの動きが読まれてしまえば意味がない、という事である。
「解りました。その大役、お受け致しましょう」
キドは喜んで引き受けた。　　そして、その晩
「こちら一班。北地区に異常は無し。　人影も見当たりません」
「そうか。こちら二班。南地区にも異常は見当たらない」
キドはこうした。　各地域に四班の護衛団を向かわせ、すべての建物を探索。そして、怪しい人影が居た場合、何をしているのかと聞く、という戦法だった。
そして、吉田の直属の護衛はチェイサーが行っていた。
「これで、何事も無く行けばいいんですがねぇ・・・」　「こちら三班！！狙撃手と思われる者に接触！！逃走しました！！」　「追ってください！！」

が、すぐに捕まった。

「ま、待ってくれ！！俺は雇われただけなんだ！！」　「嘘を吐け！！お前があの演説会で襲った狙撃手だろう！？」　「ち、違う！！俺はある男に雇われただけなんだ！！」

三班のメンバーが問い詰める。

「落ち着いてください。　そもそも、狙撃手ならばもっと早く三班の存在に気づけるでしょう？」

「た、確かに・・・・失礼しました。　お前、もう帰っていいぞ」

「お、俺は悪く無いんだからな！！」

男は立ち去った。

（・・・やはり、手の込んだ事をしますね。　まぁ、こういう事は最初から予定として入っていましたがね）

ゆっくりとコーヒーを飲みながら、待っていた。

雨の音が、淋しく響き渡る。

そんな中、吉田は。　「・・私は、この世を変えたいのだよ」

「この世を、変える？」　「うむ。私は、政治家という憧れの職に入った。　しかし、やってみればどうだ？　金で成り上がった癖に、やたらと実力の無い大臣。　口先だけで本当は有言実行をしない議員。私は思ったのだよ。　これが政治の馴れの果て、だという事を」

雨が降っている外を眺めて言う。

「だからこそ、私はこの選挙で闘い、そして勝つ。　そして。

この国を、この世を変えたいのだよ」

直後。　吉田の胸を、銃弾が貫いた。

「吉田さん！！」

続く。

第二話　「裏　前編」（後書き）

執筆者「ここで切るのが執筆者としての楽しみです」

キド「というより、吉田さんの死に方があまりにも典型的じゃないですか？」

執筆者「・・・・・気にしない方向で」　キド「本当はそれ以外思いつかなかったとか」

執筆者「ごめんなさい反省します。　なので次回をお楽しみにしてください」

キド「それでは、またお会いしましょう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1292l/

私立キド探偵事務所

2010年10月10日22時26分発行